

土づくり

小宮山 洋夫

ぼくは森川町の小道を自転車のペダルをゆっくり押して進んでいった。まだ二階建ての木造家屋がちらほら残っている。

やがて啄木が下宿していた旅館近くの造成中の児童公園にさしかかった。割烹着を着たおばさんたちが数人腰をかがめている。大きなプラスチックの漬物樽に、赤い土を入れているのである。その土は、造成中の掘り出された残土で鮮やかな赤土。公園の一隅に山をなしている。

自転車を止めておばさんたちの様子をぼんやり眺める。するとおばさんの一人から、

「タルをあげるから、土を持つていかない」と声を掛けられた。

突然の申し出に、

「えっ、えーええ」

ぼくは態度を曖昧のまま、

「どうも」

とタルを一つもらい、おばさんが渡してくれたシャ

ベルでタルの中に赤土をザクッザクッと放り込む。

「植木に使うのよ。このあたりでは土は手に入らないからね」

「ああ、そうですか。これだけ土がたくさんあれば」

ぼくは意味不明の応答をしながら土をザクッザ

クッと入れ続ける。なつかしいなあ、土いじりは。

頭にしたおばさんの手拭いに○○館の文字を見

る。あ、そうか、あの旅館で働いている人たちだ。

○○館には、正面玄関をはさむように草木を植えた
漬物樽がざらりと並んでいたな。どんな種類の植物

が植えられていたか、注意して眺めたことはなかつたが。

タルの中が土でいっぱいになると、ぼくはシャベルを返しながら、

「どうもありがとう」

と礼をいう。そして、タルを自転車の荷台にのせ、にこにこ笑っているおばさんたちを後ろに、ずれ落

ちないようタルを片手で押さえながら自転車を転がし、谷一つ隔てたアパートへ向かった。

タルをベランダに置くとタバコをふかしながら、タルの中の赤い土を眺める。

「野菜は何をつくろうか」

すでに、タルの中にシャベルで土を入れている間に、ぼくは土の利用法を決めていたのだった。敗戦直後の子ども時代、食料不足を補うために畑を手伝った土の感触が甦ったからだ。

タルの中の小さな畑にダイコンのタネをまく。発芽に成功。ハート形の子葉が開く。子葉の間から本葉が伸びる。混み合っているところを間引く。間引き葉をそのままの姿で味噌汁に放り込んで味わう。さわやかなおいしさ。自分の行為の確かな手応えいいなあ。成長ぶりを見ながら次々と間引いていく。

「よし、三本にしぶり込もう」

残されたダイコンの葉が大きく茂る。白い根が地上に浮き上がりながらグングン太る。真横からダイコンの茂みを眺めてみる。それは森だった。

「さて、収穫するか」

ぼくは葉柄をつかむとグイッと引き抜く。予想外に長い。タルの底まで達したのか、先端が曲がっている。

尻尾を切り落とし、水でサワサワと洗い土を落とす。白い肌がまぶしい。(こんなタルの中でよく出来たなあ)ぼくは、タルの中の土の威力に圧倒されてしまう。

こうして自前の小さな畑で、ぼくの野菜づくりは始まった。

*

その後、栽培用の容器として漬物樽の他に、植木鉢、プランター、トロ箱、たんすの引出し、石油缶

など、廃品を中心いろいろなものを使ってみた。

素焼きの植木鉢は土の乾きがはやい、プランターは二、三年で破損する、木箱はアリの巣になりやすい、石油缶は腐るなど欠点があり、けつきょくいまは、大半はトロ箱、一部プラスチックの漬物樽を利用している。

トロ箱とは魚などを入れる発泡スチロールの容器で、魚屋かスーパーなどで分けてもらっている。散歩の折、道端で拾つてくることもある。趣味の野菜づくりは廃品利用があさわしい。トロ箱はカッターナイフで底の四隅に二センチ角の、漬物樽は金槌と五寸釘で十数箇所、排水のための穴をあける。

栽培容器を殖やす(畑を拡張する)にあたつての問題は、用土の確保だ。ゴミが溢れる都会では栽培容器の入手は簡単だが、公園でも造成しないかぎり、土を入れるのは難しい。道路のコンクリートをはがすわけにはいかない。スーパーや園芸店で「土」も売られている。けれども土を商品として買



「ネギとツユクサ」

小宮山 洋夫・画

う氣にはなれない。それに土は重いから持ち運びが大変だ。

ふと、ぼくは昔、開墾した菜園に原っぱで刈り取った草を、大量に入れ込んだことを思いだした。そうだ、落ち葉を利用すればよい。近くに原っぱはないが、大学の森はある。というわけで、新しく植えていった栽培箱の用土の大半は、森で拾い集めた落ち葉からつくられたものだ。

まず、容器の中に落ち葉をいっぱいにギュウギュウ詰める。油粕を少量加え、混ぜ合わせておくことがある。その上に土を三センチばかりかぶせると、たちどころに新しい小さな畑が誕生する。そしてそのまま種をまく。

野菜は発芽すると、土の層から落ち葉の層へと根をグングン伸ばしていく。あのしなやかに見える根の伸張力はものすごい。枯れているけれども形ある落ち葉を、難なく突き破る。地上の葉茎もそれに応

え背を伸ばす。

一方、箱の中ではミニミズ、ムカデ、ハサミムシ、キセルガイなど、虫たちの生命活動も活発になつて、これがまた落ち葉の分解を促進する。野菜の成長とともに、堆肥づくり、土づくりがすすんでいくのである。

野菜の出来は、はじめの一、二年はあまりよくなない。落ち葉の分解がすすみ、箱の中がさまざまな生命で充満するようになると、野菜は次第にめざましい成長振りを見せるようになる。そうなれば、あとは栽培している野菜のクズをその都度、箱の中に戻すだけで、同じ畑で何年つくりづけても安定した育ち方をするようになる。肥料としては粉状の油粕を少量与えている。化学肥料も鶏糞も使わない。油粕は植物の遺体である。植物の栽培には植物を当たいということだ。もし、自分が野菜なら、そんな環境で暮らしてみたいと思う。

農薬も使わない。これまで十数年栽培してきた、病気にかかった野菜に出会ったのはトマトだけだった。野菜にとって快適な母胎で、ふつうのつくり方をすれば、野菜はなかなか病気にはならないということがわかつた。

土の中の根は、水や養分を吸収しながら、呼吸している。そこでよい土とは水持ちがよく、養分を保持して、しかも水はけがよいものということになる。この一見矛盾した状態も、土の中に落ち葉や草など有機物を投入することによってつくり出すことができる。

落ち葉はたんに用土として役立つだけではない。分解がすすむと肥料としても効力を発揮するようになる。植物の成育には、ちつ素、りん酸、カリの三大要素の他、カルシウム、マグネシウム、マンガン、ほう素、鉄など多くの種類の養分が必要である。その点、それらの要素すべてを吸収して、身体

をつくり上げた植物そのものを肥料として利用するのは、自然に従った合理的方法といえよう。落ち葉や草は、もつともバランスのよい肥料なのだ。こういうものは工業的にはつくりえない。

さらに前に触れたように、有機質に富むことで、バクテリアや小動物などさまざまな種類の生物が棲息するようになる。そしてお互いを支え合う。環境が多様化することで、病気が発生しにくくなる。自然の世界では、民主主義が貫徹している。

箱の中の小さな畑にも、いろいろな種類の雑草が入り込み繁茂している。雑草は人懐っこい植物だ。ほぼ一年を通して姿を見せるのは、ホトケノザ、スズメノカタビラ。春、気温が上ると、カタバミ、メヒシバ、ツユクサ、次いでイヌタデ、スペリヒュ

土づくりとは、どうやら多くの種類の生物が生きやすいよう、環境をととのえることにつきるようだ。そのなかで野菜も元気に育っていく。

野菜づくりといつても、環境にさえ恵まれば、野菜は植物として自分自身の力で勝手に育ついく。人や動物はそのような植物の生命過程に全面的に依存して生きるしかない。土づくりと同じように、人の出来ることは、野菜が育つ条件をととのえ作業に限られる。生物として本当の意味で自立しているのは、植物だけなのだ。

(イラストレーター)